Osaka University Knowledge Archive

Title	懐徳堂研究の可能性 : 韓国の書院と祖先祭祀儀礼から考える
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂研究. 2010, 1, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24655
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

懐徳堂研究の可能性
―韓国の書院と祖先祭祀儀礼から考える―

湯浅邦弘

一、懐徳堂研究の歴史

懐徳堂文庫と朱子学の研究

大阪大空襲の戦火をくぐり抜けた懐徳堂の資料は、戦後、大阪大学に寄贈され、「懐徳堂文庫」と命名された。この文庫の特徴は、江戸時代から昭和に至る貴重な資料群がまとまって残されているという点に、まず求められるであろう。また、資料の形態が、漢籍に加えて、和書・文書類、さらには扁額・聯・扇・印章・版木などの器物に及んでいることも大きな特色である。さらに、現在も、懐徳堂記念会の購入や関係者からの寄贈により、資料点数が増加している点も、「生きている文庫」として高い価値を持っている。懐徳堂文庫の総点数は現在約五万点にのぼる。

この懐徳堂文庫に関する研究は、まず、昭和二十年代から四十年代にかけての資料調査に始まり、昭和五十一年（一九七六）の『懐徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部）の刊行によって一応の基盤が整えられたと言える。

その中から、懐徳堂の中心的学問である朱子学の特色について研究が進められた。陶徳民氏の『懐徳堂朱子学の研究』（一九九四年）は、その代表的な成果である。以上、それは当然のことでもあった。懐徳堂資料の大半が江戸時代の漢籍に関わるものである以上、それは当然のことでもあった。

そして、昭和五十年代後半から、懐徳堂記念会の事業として行われた「懐徳堂古典講座」などの公開講座、昭和六十年代から始められた貴重文献の復刻刊行事業などによって、徐々に懐徳堂研究の成果が一般にも知られるようになった。こうした環境の中から生み出されてきたのは、もちろん江戸時代の懐徳堂についての研究である。

平成十九年（二〇〇七）に刊行された懐徳堂の総合的研究『懐徳堂研究』（湯浅邦弘編著、汲古書院）はその一例であろう。

新たな展開

しかし近年は、懐徳堂研究に新たな三つの傾向が見えてきた。第一は、漢籍以外の資料に関する研究。懐徳堂には、膨大な漢籍の他、書画、印章、屏風、手紙、版木など、さまざまな資料が含まれている。近年、ようやくこれらの資料にも目が向けられるようになった。たとえば、印章。懐徳堂には、約二百四十の印章と印譜が残っている。江戸時代の印章と印譜がこれほどまでに完璧に残っているのは珍しく、研究対象として大いに注目される。拙著『墨の道　印の宇宙―懐徳堂の美と学問―』（大阪大学出版会、二〇〇八年）はその研究成果の一端である。

第二は、デジタルアーカイブの推進。懐徳堂の資料は約二百年以上前の資料が多く、劣化も進んでいる。誰にも見せず保存すれば劣化は防げるが、研究の進展にはつながらない。一方、多くの人に公開すれば研究に寄与するが、資料の劣化は加速する。この矛盾を解消するのが、デジタルアーカイブの手法である。

懐徳堂の資料については、この数年、精力的にデジタルアーカイブ化が進められている。江戸時代の懐徳堂を復元したＣＧ画像や貴重資料のデータベースなどの公開も進んでいる。現在、懐徳堂研究に関するデジタルコンテンツは、「ＷＥＢ懐徳堂（http://kaitokudo.jp/）」に集約され、インターネットで公開されている。

第三は、重建懐徳堂期の研究。重建懐徳堂とは、大正時代に再建された懐徳堂のことである。これまでの懐徳堂研究は、江戸時代の懐徳堂に集中していた。しかし、約百年前にできた重建懐徳堂も、ようやく歴史研究の対象になりつつある。中井木菟麻呂の日記や西村天囚の書簡の解読により、重建懐徳堂成立の経緯が徐々に解明されつつある。竹田健二氏の『市民大学の誕生』（大阪大学出版会、二〇一〇年）はその成果の一端である。こうした研究によって、近世から近代に至る一つの学校の歴史が総合的に解明されると期待できるのである。

二、韓国の宗教儀礼

ただ、懐徳堂の魅力と研究の可能性は、これに尽きるものではない。そうした思いを強くしたのは、さきごろ韓国の書院を視察し、祖先祭祀儀礼に参加したことによる。

日本学術振興会科学研究費基盤研究（Ａ）「東アジア

における伝統教養の形成と展開に関する学際的研究」(研究代表者：関西大学吾妻重二氏、研究分担者：湯浅邦弘ほか）の活動の一環として、平成二十一年（二〇〇九）十一月一日から五日まで、大韓民国慶尚北道安東市で開催された国際シンポジウム「朱子家礼と東アジアの文化交渉」に出席した。安東市は、ソウルから車で東南に約三時間の山の中にあり、儒教文化を色濃く残している地である。ここに、儒教文化の振興を目的として設立された「韓国国学振興院」があり、その振興院と関西大学文化交渉学研究拠点との共催で国際シンポジウムが開催されたのである。

陶山書院と謁廟礼

学会に先立ち、十一月二日は、関係文化施設の視察・参観が行われた。まず、陶山書院に向かう。ここは、朝鮮朱子学を集大成した李退渓（一五〇一～一五七〇）の学問を讃えるため、一五七四年に設立された書院。安東市の中心部から北東二十八kmの地点にある。前には洛東江、背後には小高い山という山水秀麗の地である。見事な紅葉に彩られていた。正門を入ると、山の斜面にそっていくつかの建物が配置されている。李退渓が講学した陶山書堂、学生たちの寄宿舎である隴雲精舎、版木を収

陶山書院典教堂

蔵する蔵板閣、講堂である典教堂など。

典教堂には、李朝中期の名筆家韓石峯の筆による「陶山書院」の扁額が掛かっている。この典教堂に招き入れられた我々一行は、突然、着替えを指示された。着替えと言っても、「道袍」と呼ばれる儀礼用の服と冠を着けるだけなのであるが、厳かな気分になり、典教堂の裏手にある尚徳祠（李退渓の神位を安置する）において謁廟礼を行った。

陶山書院は、嶺南儒学者の精神的支柱としての機能を果たし、朝鮮書院のモデルとなった。典教堂には朱子の白鹿洞書院掲示が掲げられており、懐徳堂と同じく朱子学を根本精神とした学問所であることが分かる。また、弟子たちのみならず、地域の有力者にも支持され、宗教施設としての一面も備えている。

鶴峰宗宅と祠堂

続いて、安東金氏台庄斎舎を訪問した。ここは、安東金氏の始祖金宣平の祭祀を行うために一七五〇年に建てられた斎舎である。安東地域の斎舎の中では最大規模で、裏手には立派な墓所もあった。毎年陰暦十月十日に祭祀が挙行されるという。

午後向かったのは、鶴峰宗宅である。ここは、李退渓

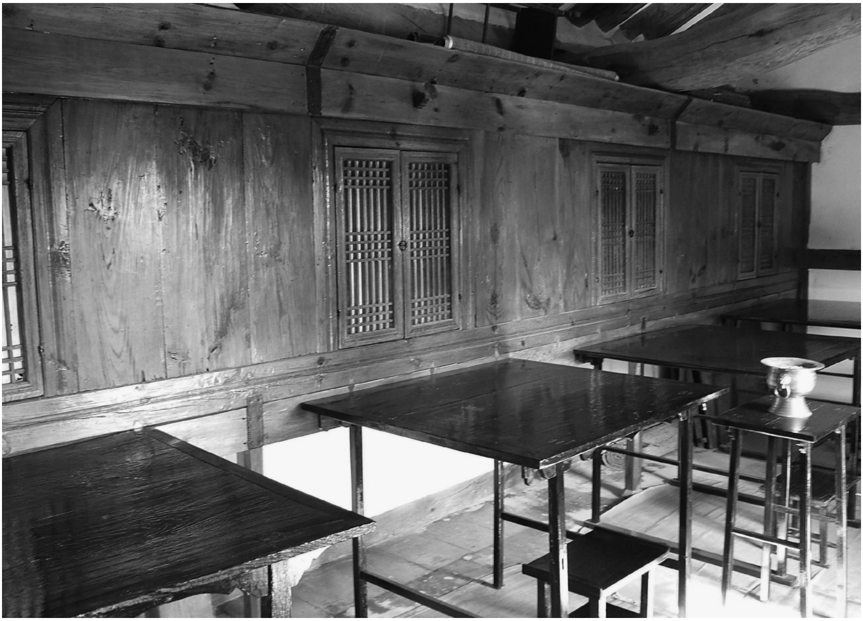
陶山書院における謁廟礼参加

の弟子として名高い金誠一（号は鶴峰、一五三八～一五九三）の旧宅である。ここで最も注目されたのは、祠堂である。朱子『家礼』に記載されたとおり、四つの区画に分かれた観音扉の四龕があった。向かって右から順番に、父、祖父、曾祖父、高祖父の神位をそれぞれ櫝に収めている。特別に、一つの龕を開き、中から神位を取り出して見せていただいた（次頁参照）。

江戸時代の懐徳堂にも、祠堂があったという。それは、旧懐徳堂平面図から分かるのであるが、朱子『家礼』の記載通りではなく、独立した構造物ではない。あくまで学舎の一室を祠堂に充てているというものである。また、部屋の奥が四つの小さな空間で仕切られていたようであり、これが四龕に相当するものであったと推測される。だが、朱子『家礼』に記載されている通りの四龕と櫝と神位とを実見したのは、今回が初めてであり、極めて貴重な体験であった。

また、ここには、雲章閣という資料館が併設されている。数多くの指定文化財典籍・古文書に混じって、朝鮮最古という鶴峰使用のメガネや革靴なども展示され、注目された。

金誠一旧宅



金誠一旧宅祠堂

同・神位

豊産金氏大枝斎舎と不遷位祭祀

この日の夜は、金楊震（一四六七〜一五三五）の旧宅に向かった。ここで挙行される不遷位祭祀に参加するためである。

朱子『家礼』にある通り、祖先祭祀は、通常、高祖父から父まで四代の祖先を祠堂で祀る。右の鶴峰宗宅の祠堂にあった四龕がそれを良く示している。そして、世代が交代すると、それぞれの神位は右から左へと一つずつ移動する。向かって左端にあった高祖父の神位は、祠堂から神位を遷し、それ以後は墓所において墓祭を行う。

ところが、国家や一族にとって極めて重要な業績をあげた祖先に対しては、永遠に神位を遷さず祠堂で祭祀を執り行う。これが不遷位祭祀である。

従って、不遷位を祭るのは、一族の栄誉であり、かつ、一族の結束を再確認する重要な儀式なのである。安東全体では、四十七人の不遷位を祭っているという。この金氏の不遷位祭祀は毎年陰暦の九月十六日に行われ、それがちょうど我々が参加した日であった。地元のテレビ局も取材する中、大枝斎舎の虚白堂の中で祭祀は進行した。

本来は、前日の深夜から当時の明け方にかけて挙行するのが正式な祭祀であるが、近年は諸般の事情により、夜七時くらいから開始するという。捧げられた供物は、その後分配され、虚白堂の両側に併設されているオンドル部屋で、参加者全員が会食した。ここまでが、一連の儀式である。最後に、「時到記」と書かれた参加者名簿に記帳して、散会となった。

三、国際学会と研究の視点

蔵板閣の版木

翌十一月三日と四日、二日にわたって国際学会が開催された。場所は安東市内から二十kmほど山の中に入った

金楊震旧宅不遷位祭祀

韓国国学振興院である。初日午前中は、まず国学振興院に併設されている儒教文化博物館を参観した。四階からなる大きな建物で、「儒教との出会い」「儒教と修養」「儒教と国家」などテーマ別に展示室が分かれている。

中でも最も注目されたのは、蔵板閣である。国学振興院が全国から収集した版木や扁額が五万七千点収蔵されている。先に記した陶山書院の扁額も、実は現地にある方がレプリカで、こちらに収蔵されているのが本物である（次頁参照）。また、陶山書院所蔵の古書約五千点と版木二七九〇点も、保存と学術研究のため国学振興院に委託されている。二棟に分かれた蔵板閣には、天井までびっしりと版木が配架されていた。懐徳堂文庫にも二百枚を超える江戸時代の版木が残されているが、こちらは朝鮮版なので、ひとまわり大きい。国学振興院では、「木版十万枚収集運動」を展開していて、十万枚に達したら、世界文化遺産に申請するという。

郷校と懐徳堂

午後から翌日にかけて学会が開催された。全体テーマは「朱子家礼と東アジアの文化交渉」。筆者が発表した四日の分科会は「日本家礼文化の諸様相」であった。筆者の発表タイトルは、「朱子『家礼』と懐徳堂『喪祭私説』」

韓国国学振興院蔵板閣

というもので、江戸時代の懐徳堂が朱子の『家礼』をどのように受容していたかを、中井甃庵の『喪祭私説』と懐徳堂の祠堂の設置状況を基に解説した。

　予想外に、フロアからの質問が相次いだ。一つは、朝鮮の郷校と懐徳堂との性格の違いに関するものである。都の国立大学に対して、地方の公立学校を郷校と言い、これが朝鮮儒教の展開において重要な役割を果たしている。この郷校と懐徳堂とはどう違うのか。まず、設立の経緯が異なる。懐徳堂は、江戸時代大坂にできた学校であるから郷校的であるとは言えるが、設立したのは、五人の有力商人であり、その後も半官半民の学校として大坂町人による運営が続いた。また、受講生は、郷校の場合、科挙を目指す知識人であったが、懐徳堂では町人から武士までさまざまであった。科挙制度の導入されなかった日本では、目指すものも異なっていた。受験ではなく、懐徳堂という名称が示す通り、漢籍の学習を通じた倫理道徳の体得であった。

　また、郷校にはさらに二つの機能があった。出版所と宗教施設という機能である。陶山書院に大量の版木が残されていることから分かるように、郷校や書院は、地方の出版文化に大きく貢献した。また、地方の著名人を祭祀する宗教拠点でもあった。これに対して、懐徳堂は、

蔵板閣所蔵扁額

印刷所としての機能は備えていたようである。旧懐徳堂平面図を見ると、「学校刷り部屋」という一画がある。実際に懐徳堂蔵版として刊行された書もある。だが、それは、懐徳堂の学者が著述した書が中心であって、広く書物を刊行販売するというものではない。また、懐徳堂には祠堂があったが、それは懐徳堂歴代の学主を祭るための空間で、広く大坂の宗教施設として機能していたわけではない。

今ひとつの質問は、義と利に関するものであった。筆者の発表で、懐徳堂において利益追求の基盤として「義」が重視されたことを説いた。ただ、利は決して否定されていたわけではなく、「義」を実践する者には後から必ず「利」がついてくると説かれていたことも紹介した。これに対して、朝鮮儒学では、「利」をそのように捉えることはなく、そうした「利」と「義」の関係が生じたのはなぜかという質問である。もちろん、「利」と「義」をさほど対立的に捉えないのは、中国儒学の中にも見えるが、もう一つ、土地柄の問題として、筆者は、商業都市大坂の気風を説明した。

東アジア文化圏における懐徳堂

このように、韓国の歴史文化から逆照射することに

よって、懐徳堂研究の新たな視点が得られたように思われる。

まずは、資料の特殊性である。韓国でも、版木を大切に保存し、収集活動に努めている。懐徳堂には二百枚ばかりの版木があるが、これとて日本全国では貴重なコレクションと言えるであろう。こうした資料を意識的に保管し、収集していかないと、大切な印刷文化の一つを失うことになる。また、版木以外にも、懐徳堂には、印章・屏風・聯など、当時の学校を髣髴とさせる器物が数多く残されている。ともすれば、これらは書籍の陰に隠れて忘れられがちであるが、こうした器物こそ、その保存と顕彰について充分な検討をしていく必要があろう。

第二は、懐徳堂の書院としての性格である。中国・韓国にも「書院」が残されている。懐徳堂も、「懐徳書院」と称することがあった。では、東アジア文化圏において、懐徳堂はどのような「書院」だったのであろうか。これは、右のシンポジウムの質問に見られたように、近隣諸国との対比によって明らかになっていくであろう。出版や宗教の機能という点は、まだ充分な解明がなされているとは言い難い。また、設立の経緯や運営形態、受講生層、講学の内容、使用されたテキストなど。こうした点を総合的に検討し、東アジア文化圏における懐徳堂の位置を解明することが重要であろう。